

# 特集—海と島の日本・VII

- ・島——現代の実相を映す鏡として  
芥川 仁……………25
- ・海ゴミ回収の現場から——第二回粟島クリーンアップ作戦  
本誌編集部……………36
- ・「離島漁業再生支援交付金」の活動事例について  
水産庁漁政部企画課……………44
- ・〈島〉という〈異界〉  
菅田正昭……………50

# 島——現代の実相を映す鏡として

芥川  
仁

自然にせよ経済にせよ、海に隔てられた島々を取り巻く環境はじつに厳しいものがある。その厳しさが日常の切なさとして潜み、切なさを抱えながらも、否、抱えているからこそ仲睦まじく平穏な暮らしを維持しようとする島の人々。物質的な豊かさを享受し、さらなる潤沢の地平へ向け加速しようとする現代にあつてこそ、われわれは島々の存在を「合わせ鏡」として、この島国の行く末を考えるべきではないのか。

平家物語の舞台「鬼界ヶ島」で上演された新能「俊寛」

家族四人で始めた伊豆大島での暮らし

島を見る目を変えた通過儀礼「天踊り」

厳しい自然を根底とする島を私たちの合わせ鏡に

## 平家物語の舞台「鬼界ヶ島」で 上演された薪能「俊寛」

活発な噴煙を上げている硫黄岳の荒々しい山肌が、村営フェリー「みしま」の甲板に立つ私の目の前に迫ってきた。時折、硫黄の匂いが風に乗ってフェリーの甲板にまで届く。鹿児島市の港から四時間。鹿児島県三島村硫黄島港の防波堤内に入ると鉄さび色の海となった。鉄分を含む温泉が海底から噴き出しているためだ。どこの島にも共通するコンクリート剥き出しの栈橋で、地元の子どもたちがジャンベを叩いて陽気に踊っている。このフェリーに乗って島を訪れた能楽師・梅若玄祥さん（六一歳、六郎改め）の一行を歓迎しているのだ。明日の夜は、港近くの特設能舞台で薪能「俊寛」が上演されることになっている。

硫黄島は、古くに鬼界ヶ島と呼ばれ、平家物語に登場する鹿ヶ谷の変で流罪になった僧・俊寛が置き去りにされた島だ。恩赦にも浴せず一人残された後、断食によって自らが命を絶つまでの約一年間を過ごしたとされる庵が現在も残っている。このように「俊寛」にゆかりの深い鹿児島県三島村は、硫黄島の他に、竹島、黒島の三つの島からなり、三島を合わせた村全体の人口は約四〇〇人。薪能「俊寛」を硫黄島で上演する企画は村役場で立て、国立能楽堂が制作協力して実現することになった。

いよいよ五月三〇日、大松柱の炎が薪能の特設舞台を照らし、漆黒の闇に幻想的な「俊寛」の舞台が浮かび上がった。

平家討伐の密議が露見し、流罪になった俊寛と平康訓と藤原成経の三人。島流しから一年後、中宮・平徳子の懐妊に伴う恩赦で放免使がやって来る。しかし、放免状に俊寛の名はなく、同罪だった平康訓と藤原成経の二人だけを乗せて島を離れようとする船。「うたてやな公の私と言うことあれば、せめては対の地までなりとも、情けに乗せてたび給え（情けない、公務とはいえ情けで多少は斟酌もできるはず、せめて薩摩の地まで乗せて下さい）」と、寄りすぎる俊寛。

八三〇年の歳月を経た物語ではなく、シテ方観世流・梅若玄祥の演ずる俊寛の哀しみが、目の前に展開している現実の場面として胸に迫ってきた。

俊寛を置き去りにして、艫綱を押し切って船が出て行く終盤のクライマックス。それまで闇の中だった背景の岸壁が照明で浮き上がり、壮大な自然と舞台が一体となった薪能は、夢か現かと思えばかりの幻想的空間となって私を魅了した。

平穏な海と晴天に恵まれるという強運で、実現した硫黄島の薪能だった。経済が、人が、自然が、取り巻く状況のすべてが厳しい島々は、時折、元気になるためのカンフル剤のように、大きな企てが必要になるのかもしれない。硫



活火山島の硫黄島。鉄分を含む温泉が海底から湧出し、港内の海は鉄さび色をしている。

黄島の薪能も、その一つとして村を挙げての大イベントであった。しかし、海に隔てられた島が抱える日常は、運に任せてばかりにもおられない。島には、背負っている自然の厳しさが、日常の切なさとなって潜んでいるように私には思えてしまう。私には、その切なさを抱えながらも、平穏な暮らしを維持しようとする姿こそが島の宝だと思える。

### 家族四人で始めた 伊豆大島での暮らし

私が初めて出会った島は、東京都の伊豆大島である。特に、目的もなく志もなく、東京都区内を逃げ出すように三五年前の正月、移り住んだのが伊豆大島だった。若気の至りと言えば妻に叱られるが、一途な思いから前後の見境もなく結婚し、子ども二人が年子で誕生し、売れない写真も撮っていた私は、目の前の貧しさから逃れたく、藁をも縋る気持ちで妻の友人が居る伊豆大島へ渡った。理由はただ一つ、家族四人が六畳一間のアパートから脱出するため「安くて家が借りられる」ということだった。この時、島の現実は何一つ知らなかった。

東京の竹芝桟橋から、たかだかひと晩船に乗れば到着する島。なんせ東京都であると、高を括っていた。

引越した一月は、島全体に椿が咲き誇る季節だ。観光客も多く華やいだ雰囲気島の何の不安も感じなかった。

借りた家は、伊豆大島南西部の間伏地区まがしの道路脇にある一軒家。近くの農家が以前住んでいた家で、「家賃はいらない」と言ってもらったのに、意地を張って「せめて、ひと月焼酎一本で」とお願いして借りた。現実には、その焼酎一本でさえ滞りがちだったのだが。

この家は、六畳と四畳半の畳の部屋と板の間の台所。風呂は、近くの椿林に落ちている枝などを拾ってきて燃やす五右衛門風呂だ。窓を全て閉めていても、冬の西風が吹く時には、家の中に吊したカーテンが揺れるほどの寒い家だったが、開放感があり、好感を持って暮らした。家の前の庭を少し耕して、なにがしかの野菜を見よう見まねで栽培することもできた。

悩まされたのはムカデだ。一歳の誕生日をようやく過ぎた娘が、夜中、激しい泣き声を上げるので布団をはぐってみると、彼女のお尻に長さ三〇センチほどのムカデが食い付いていたこともあった。こうなると夜眠ることができない。布団には入っても、微かな物音に耳を澄ませて緊張している。夜中が過ぎた頃、緊張に疲れてウトウトと寝入ることになるのだった。一日に何匹も見つけては、風呂焚きの火挟みでつかみ、熱湯を掛けて殺した。

と言っても、一日中ムカデ退治をしていた訳では、もちろんない。

家賃は焼酎一本と言えども、現金収入がなければ生活が



巨大な柱松（はしたまつ）を背景に、歴史上の舞台で新能「俊寛」は演じられた。

できない。四万円です話してもらった軽自動車は、ガソリン無くして動かせない。最初に就いた仕事は、コンクリートブロックを積む職人の手元だった。写真の仕事を忘れていたのではないが、撮影するためのフィルムを買うお金さえもなかったのだから、とりあえずは現金収入なのだ。ブロック職人の手元は、面白い仕事だった。

セメントを練る際の砂と水の入れ具合や練る時のスコップの返し方など、微妙なコツがあつて、それらのコツが自分のものになっていく充実感が、仕事をしている満足感でもあった。三ヶ月もすると「お前やってみろ。もう出来るぞら」と、簡単なブロック積みを見せてもらえるようになった。仕事が一層面白くなった。

こうして何とか食えることはできたが、本来しなければならぬ写真の仕事は、ますます遠ざかるばかり。

そんな状況で島に暮らし始めて半年後、インドへ三ヶ月間撮影に行く話を持ち上がり、私は有頂天で、何もかも忘れてインド行きに没頭した。島に残った家族がどのようにして生活をしていけるのか。現実的な対策もしないまま、インドへ出発した。家族はその間、収入が途絶え、生活ができなくなつて、私の宮崎の実家に転がり込むしか選択の余地はなかったと、後で知った。

四ヶ月ほど家を空けて、伊豆大島へ家族で帰った。「家を出て行ってくれ」。家主の言葉が待っていた。世間知ら



新能の当日、硫黄島の子どもたちに能のワークショップを行う梅若玄祥さん。





伊豆大島の“通過儀礼”となっていた差木地青年団の「大踊り」(1975年頃撮影)。

ずの甘えが過ぎたようだ。

最初に借りた家には半年間住んだだけだった。

私たちが伊豆大島に転居するきっかけをつくってくれた妻の友人で版画家の本多保志さんが、多くの島の人びとを紹介してくれたのが助かった。なかでも私たち家族が支えにさせてもらったのは、近所で養鶏場を営む丸尾時彦さんの一家だ。本多さんは、丸尾さんの養鶏場を手伝いながら木版画を制作していた。丸尾さんは、祖父母の代に島外から移住してきて間伏地区に居を構え、その頃には小学校のPTA会長を務め、波浮地区にあるキリスト教会の役員をされるなど地元で根付いた活動をされていた。

その丸尾さんと話していて忘れられない言葉がある。

「祖父母の代に大島に来て、私で三代目。ようやく島の間として認められたかなと思うけど、根っからの島の人たちとは、まだ見えない溝のようなものを感じることもある。根っからの島の人間には、結局なれないのかも知れないな」  
この頃から、島とは何かと、私は、考え始めたような気がする。

### 島を見る目を変えた通過儀礼

#### 「大踊り」

間伏地区で民宿をしていた石川千年さんが、港のある元町で旅館を始めたために、民宿と石川さん夫妻が住んでい

た自宅が空き家になっていた。丸尾さんの仲介で、その家を貸してもらえたことになった。同じ間伏地区の中で、椿林の中にある大きめの石川さんの家に引っ越した。椿の木を伐らなければ、自由に使って良い二〇〇〇坪の土地が付いた家だ。こんどの家は、月家賃が焼酎一本という訳にはいかない。それでも月七〇〇〇円。家の前には池があり、その先には、石川さん夫妻が丹念に耕した一反の畑もあった。

ようやく島の暮らしに落ち着きが出てきた。

その頃、元町にある写真屋の谷口商会が店員として働かないかと、声を掛けてくれた。私にとっては、写真に係わる仕事として嬉しい話だ。しかし、写真家として仕事を続けていくためには、島の中で撮影できる自らのテーマを見つけなければ。

そんな悩みを抱えていた時、谷口商会で暗室を担当していたタケちゃん、彼が住んでいる差木地区青年団の成人式行事「大踊り」を撮影に来ないかと誘ってくれた。差木地区は、私の住んでいた間伏の隣の集落で、伊豆大島南西部の中心地だ。

一月十五日の朝、地元の氏神春日神社に、青年団の男が和服、女性はあるこ姿で集まり「大踊り」を奉納する。日が暮れてから、新成人の家を一軒一軒訪ねて、唄を唄い「大踊り」を踊って成人を祝う伝統行事である。新成人の

いる家庭では祝宴を準備し、「大踊り」で祝ってくれた青年団をもてなすのだ。この年は、差木地区に五人か六人の新成人が居た。

翌一六日の夕方近くになって、海辺の岬に祀ってある浜宮様の祠前の広場で、大漁祈願の「大踊り」

を奉納して儀式は終了する。強い西風が吹き付ける岬の上で、野太い唄声に合わせて踊る「大踊り」は、勇壮で美しく、島の若者に粗野な魅力を感じた（春日神社への奉納踊りは続いているが、新成人の家を巡り「大踊り」で祝う行事は、現在行われていない）。

この日を境に新成人は、青年団員として認められ、地区の行事にも一人前として参加することが許される。島の集落なので、誰もが生まれれた時から顔見知りの遊び仲間だ。しかし、だからこそ「大踊り」のような通過儀礼を行って、区切りを付ける必要があるのだ。

差木地区の青年たちと顔見知りになったこの日を境に、島で生まれ育つことの幸せを意識し始めたように思う。生まれれた時から共同体の一員として受け入れられて育ち、誰

### あきたがわ じん 芥川 仁

写真家。1947年愛媛県生まれ。3歳から高校卒業までを宮崎市で過ごす。1970年法政大学二部社会学部応用経済学科卒業。東京、伊豆大島、水俣を移り住み、1980年から現在まで宮崎市在住。主な著書に『水俣・厳存する風景』『土呂久・小さき天にいだかれた人々』『輝く闇』『銀鏡の宇宙』『リトルヘブン』『春になりては 椎葉物語』などがある。



もが身内のような集落で生活し、平穩が当たり前の人生。得てして世の人々は、波瀾万丈の人生を尊ぶ傾向はあるが、淡々とした穏やかな一生にこそ、真の幸せが潜んでいるように思えたのだ。そんな穏やかな人生の中で、通過儀礼によって共同体と共に成長を自覚する。それが、差木地青年団が「大踊り」を継承していく意味なのだと思う。

### —— 厳しい自然を根底とする島を 私たちの合わせ鏡に

さて、差木地青年団の「大踊り」に出会ってから、伊豆大島で自分らしい写真が撮れる気になったのは確かだ。私の島を見る目が変わったとも言えるだろう。島の何でもない日常の暮らしぶりに目が向くようになった。

さらに三年間の歳月が島で流れた。ある日、間伏地区の知り合いが、家を訪ねてきた。「誰々さんの家で通夜があるので、エプロンを持って手伝いに来てください」と、言う。葬儀賄いの要請だ。地区の集まりに声を掛けられるなどの前触れはなく突然だった。もちろん妻は、エプロンを掴んですぐ

に手伝いに行った。その時、これでやっと地区の住民として認めてもらえたという安堵の気持ちが湧いた。嬉しくもあった。

島の人々と交流ができたのは、何と言っても保育園へ通う二人の子どもと妻の存在があったからだ。保育園の父母の会、保母、地域の人々との付き合いは、すべて妻がやってくれた。私の収入の少なさを補うために、キヌサヤエン



大島にて。家の前の池に落ちて泣き叫ぶ娘の晴。



最初に借りた家の窓から外を眺める息子の寛。

ドウの収穫時期などの農繁期には、保育園近くの農家へアルバイトにも行った。

私はと言うと、谷口商会へ店員として働きに行くほかは、

写真のことだけを考える毎日だった。少し貯金ができると、そのすべてを持って島外へ取材に出かけ使い果たして帰ることも度々だった。妻が地元の人々との繋がりを深めているのに、私が話をするのは、主に島外から移住してきた人々だった。私が借りていた家の隣の民宿棟に、都立大島高校の教師だった岩瀬政夫さんの家族が引っ越してきた。

そうなると岩瀬さんとは、お互いの軒がくっついている隣同士なので、頻繁に行き来して深い交流があった。私にとっては、その後の人生の流れを大きく変える水俣病患者との出会いも、岩瀬さんの存在なしにはあり得ないのだが、ここでは深入りしない。よそ者として島に生活する岩瀬さんと私は、島と島を繋ぎ本土を包囲する「島風通信」発行の



船を見送る人たち（1975年頃元町港で撮影）。

話題で盛り上がった。

何事についても、本土と島を比較していたのでは、本来持っている島の魅力を見失ってしまう。しかし、島で手に入れることのできる情報は、ほとんど本土から発信されている情報だ。島は島同士と結ばれ、島同士で情報を交換することで、島本来の姿を自覚し、その魅力を知ることができるとはいえないか。

そんなことを声高に話し合った。実際に、他の島で「風通信」の拠点となってくれそうな人物を捜した。何人かの名前は挙がった。しかし、そのすべてが本土からの移住者なのだった。もちろん、私たちもそうだったのだが。私たちはやはり、島に生まれ育った人々と繋がりがなかったのだ。そこで行き詰まってしまい、意気が上がらなくなってしまった。

その後、しばらくして私は、インド取材の時と同じように前後の見境もなく、水俣病事件の取材をするために島を飛び出して、水俣で単身生活を始めた。今度もまた、家族は、放置したままだ。そして四ヶ月後、とうとう家族は島の生活に行き詰まり、島を引き上げて再び宮崎の私の実家に居候をすることになる。それから、もう三〇年余が過ぎた。私が置き去りにした家族が島を離れる日、船が出る元町の桟橋には、子どもが通っていた差木地保育園の園児や父母、保母、知り合いになった差木地や間伏や元町などの



漁から波浮港（はぶみなと）に帰ってきた大島の漁師（1975年頃撮影）。

島の人たちが一〇〇人以上も見送りに来てくれたと、妻は今でも涙声で、その時の光景を話す。

その話を聞く度に、島の人々の気持ちも知らず、私は何と自分勝手に恩知らずだったのかと、後ろめたく胸が痛む。子どもたちは、中年に手が届く年齢になった今でも、「自分の故郷は大島」と、言う。島は、恩知らずの私にさえも、家族を温かく包んでくれた思い出だけを残してくれた。

こうして伊豆大島で暮らした五年間を思い返すと、胸の奥を締め付けるような切なさが入り込んでくる。それは、私自身が抱えていた先の見えない悩みによるものも大きい。島が晒されていた先の自然の厳しさが根底にあるからだ。伊豆大島を離れた後も、いくつかの島を取材で訪ねた。どの島でも、足を踏み入れると込み上げてくる切なさがある。私は、この切なさに直面するたびに、伊豆大島で知った平穏で温かい暮らしを思い出し、我が儘に先を急いで生きてきた自らの姿を意識する。島が厳しい自然に晒されているからこそ、人々は仲睦まじく平穏に暮らすことの大切さを知っているのだ。物質的には豊かになったが、人の繋がりが稀薄になったと言われる現代。今こそ、島を合わせ鏡として、本土で繁栄を享受する私たちの姿を映し出す時間なのだと思う。